# 健康のススメ

板東 浩

## 「音楽の花開く」（第五十八回）

ピアノ・パラリンピックinJapan第1回大会が開催された。予選を通過した参加者は17か国から96人。名誉会長の日野原重明氏と長年組織を育ててきた迫田時雄氏が、世界の「不可能を可能にする人たち」によるピアノ音楽の祭典であると挨拶された。

会場の横浜みなとみらいホールは、チケットが完売し熱気あふれる雰囲気。審査員は海外8名国内8名で構成され、その重責の一端を担当することに。自由曲と課題曲部門があり、後者は「さくらさくら」を編曲し演奏するものだ。

いずれの演奏も素晴らしく、聴衆はあっという間に感動の渦の中へ。私は音楽を聴きながら、モニターに映る手の動きを目で追っていた。曲想にはいろいろな解釈が加わり、身体の機能を最大限に生かす工夫が認められる。課題曲では、伝統的な日本の旋律に四季の移り変わりと物語が表現され、豊かな感性が表出された作品もみられた。

参加者が有するのは半身麻痺、指の欠損、ダウン症、自閉症、全盲などの障害。最近は「障がい」と記載されることがある。本来「障碍」だったが、当用漢字でないため他の字を借用した経緯があるためだ。送電線に附随する白い碍子は絶縁体で、碍とは抵抗を意味している。

作曲家の中で、ベートーヴェンは聴覚障碍に苦悩しながら音楽の歴史を変えた。また、琴の名手・宮城道雄は視覚障碍がありながら、色彩感溢れる楽曲を残した。ハンディや抵抗に負けず、続けていってほしい。「念ずれば花開く。」

（医学博士・内科医師）